染香 ぜんこう

福泉寺寺報
令和5年5月
第 117 号
毎月 1 日発行

ホームページ

お寺 LINE

子ども行事

化身。

先月、庄原市にある親戚寺の前住職の通夜に参りました。お若いご往生でした。たくさんのお子さんやお孫さん、ご兄弟、高齢の母君が皆泣き崩れていました。

境内地に高齢者施設を建て、仏教精神を実践に活かす「動ある人」でした。一方で多忙の中、学問や著作活動にも勤しみ沈思黙考（ちんしもっこう）の「静ある人」でもありました。

通夜のお勤めが済み、住職である息子さんが喪主挨拶をなさいました。

「私は小さい頃、父のことを『お釈迦様か観音様の生まれ変わり』と本気で思っていました。どんな時も優しかった。外に連れていかれても、偉ぶる姿はなく、いつも謙虚だった。大人になって、そんな思いも薄らいでいったのですが、親鸞聖人と妻の恵信尼（えしんに）さまが、直接は言わないけれど、お互いに観音様の化身と思っておられたという話が、今ならよくわかります」

沁み入るように　拝聴しました。

少し、補足をします…。

親鸞聖人は、「お経」に登場するすべての人物を「わが身に念仏を称えさせる化身」と見ておられます。これを「権化（ごんけ）の仁（にん）」と言います。登場する人物の中には、悪事をそそのかす者も、実際に人を殺してしまう者もいます。

聖人は、善いことや正しいことをする存在だけが「観音さまの化身」ではない、というのです。私にとって苦手な人、不都合な人、思い通りにならない人までもが、私の心を育て、わが人生に磨きをかけてくれる。思い方ひとつで、そんなご縁になっていく。

この世界は、あきれるほどに思い通りにいきません。そのことを十分知っているつもりなのに、なお抗（あらが）ってしまいます。

そんな「私」を見つめなおす場所が「お仏壇」や「お墓」です。なぜなら、お経は、「この世界の苦悩の解決方法」が説かれているからです。亡き人の供養を通して、わが身を照らす「鏡」のような場所になったら、お参りも一味違ってくるのでしょう。

（住職）

真宗　法事　あれこれ

【服装】

仏事の「正装」は「礼服」です。でも、そのように決まったのも明治以降の事です。しかも、黒服はキリスト教圏の正装です。

いわゆる「洋服」が日本人の一般的服装となって歴史が浅いですが、これを「当たり前」と思ってしまうのも、なんだかなぁ、と思います。

また、身内だけの法事では、「普段着でもいいですよ」と声をかけたりもします。そんな中、時々「五十回忌」に全員正装でお参りくださる家族があったりして、読経の声にも一段とチカラが入ることもあります。

ちょっと　あたまの　こりほぐし

ひっくりかえった途端に

軽くなる動物はなんでしょう？

（小学生問題！）

※答えは裏面です

おてらより

月忌参り・祥月参り いたします

ご希望があれば、亡くなって何年経っても、月忌（月命日）や祥月命日に参らせていただきます。前住職がよく参っていたそうです。

コロナ禍で思うように活動できませんでしたが、すこしずつ引き継ぎをしていこうと思います。詳細は、後日お渡しする「返信ハガキ」にてお返事ください。

新しい納骨施設が完成

JA の指定業者さんである「オカダ石材」様が、境内地に建立してくださいました。

「従前の墓の維持管理が困難」「墓じまいを検討している」「墓はこれからだが、大きな墓石は不要」「まだ間に合っているが、次世代のために手を合わせるところを確保しておきたい」「寺の境内地に墓が欲しい」など…どうぞご相談ください。

残りは 21 部屋です。

『染香（ぜんこう）』は、香りが身に染まるように、お念仏を申すわたしの人生が仏さまの智慧の香に染められ、美しく飾られるという、お経の言葉です

縁を育む

雑誌致知二〇〇五年十二月号の特集「縁を生かす」に、文学博士・鈴木秀子先生から聞いたというお話が載っています。その「縁を生かす」より引用します。

その先生が五年生の担任になった時、一人、服装が不潔でだらしなく、どうしても好きになれない少年がいた。中間記録に先生は少年の悪いところばかりを記入するようになっていた。

ある時、少年の一年生からの記録が目に留まった。

「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。勉強もよくでき、将来が楽しみ」とある。

間違いだ。他の子の記録に違いない。先生はそう思った。

二年生になると、「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する」と書かれていた。三年生では「母親の病気が悪くなり、疲れていて、教室で居眠りする」。後半の記録には「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる」とあり、四年生になると「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、子どもに暴力をふるう」。

先生の胸に激しい痛みが走った。ダメと決めつけていた子が突然、深い悲しみを生き抜いている生身の人間として自分の前に立ち現れてきたのだ。先生にとって目を開かれた瞬間であった。

放課後、先生は少年に声をかけた。

「先生は夕方まで教室で仕事をするから、あなたも勉強していかない？判らないところは教えてあげるから」。少年は初めて笑顔を見せた。

それから毎日、少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。授業で少年が初めて手をあげた時、先生に大きな喜びがわき起った。少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスの午後だった。少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。あとで開けてみると、香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていたものに違いない。先生はその一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。

雑然とした部屋で独り本を読んでいた少年は、気がつくと飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。

「ああ、お母さんの匂い！きょうはすてきなクリスマスだ」

六年生では先生は少年の担任ではなくなった。卒業の時、先生に少年から一枚のカードが届いた。

「先生は僕のお母さんのようです。そして、いままで出会った中で一番すばらしい先生でした」

それから六年。またカードが届いた。

「明日は高校の卒業式です。僕は五年生で先生に担当してもらって、とても幸せでした。おかげで奨学金をもらって医学部に進学することができます」

十年を経て、またカードがきた。そこには先生と出会えたことへの感謝と父親に叩かれた体験があるから患者の痛みが分かる医者になれると記され、こう締めくくられていた。「僕はよく五年生の時の先生を思い出します。あのままダメになってしまう僕を救ってくださった先生を、神様のように感じます。大人になり、医者になった僕にとって最高の先生は、五年生の時に担任してくださった先生です」

そして一年。届いたカードは結婚式の招待状だった。

「母の席に座ってください」と一行、書き添えられていた。

人はよき縁を頂き、そして縁を生かして生きていくことを感じさせる逸話です。彼（か）の少年も一人の先生の縁を頂き、その縁を生かして成長していった。ポツンとたたずむ一人のひとであっても、その人の歴史の中に多くのつながりがある。そのつながりを「縁」という。その縁は縦横無尽につながっていて無関係なものはないと仏教では説く。

その縁を見るまなざしを仏教では大切にしている。そして浄土真宗ではその縁を大切にしない凡夫であっても、その凡夫の私を大切にして下さる仏さまがおられると示されている。（終）

法要後記

先日の三月二十一日、春の永代経・彼岸法要では、東かがわ市・大信寺の川田先生にご法話を頂戴しました。

お参りの皆さまは、どんなお話が印象的でしたか？私は、「仏さまの『智慧』と人間の『知恵』の違い」の話が心に残っています。例えば、一本のコーラを二人の兄弟が不満なく分けるにはどうすればいいか。

①まずお兄ちゃんが同じ大きさのコップを二つ用意して、半分に分ける②次に、弟にどちらか好きな方を選ばせる。

こうすれば「分けたのは兄」「先に選んだのは弟」ということで、双方不満は残りません。

これが「人間の『知恵』」だといいます。

それに対して、「仏さまの『智慧』」は？

…またおしゃべりしましょう。